遠山記念館だより

第60号

神人・動物文様描染布　　97.3 × 127.2（cm）
ペルー　チャンカイ文化（1100 – 1470年頃）

◇◇ 館蔵品紹介 ◇◇

昨年来世界中に蔓延している新型コロナウィルスにより、私たちはあたり前に続くはずだった日常を奪われ、「新しい生活様式」への転換を余儀なくされるようになりました。ワクチンや特効薬の開発と実用化が待たれる中、日本では神頼みならぬ「アマビエ頼み」が一世を風靡したことはご記憶の方も多いことでしょう。豊作と疫病の予言をする海の妖怪アマビエは、江戸時代後期、肥後国（熊本県）の役人の前に現れ、自分の姿を写して人々に見せれば病から逃れられる、といい残し海に消えたと伝えられています。現在様々な媒体で表現されているアマビエのイメージは、役人がその場で描いたスケッチを摺りものにした挿絵が元になっているといわれています。

妖怪というにはあまりにも「かわいい」アマビエ

の挿絵を見ながら、そういえば当館にも似たような作品があるではないか、と思い出したのが表紙写真の描絵でした。

この絵は古代アンデス文化のひとつ、チャンカイ文化の出土裂に描かれたものです。チャンカイはインカ文化以前にペルー中部海岸地方、チャンカイ川流域に興った文化で、北にチムー、南にチンチャという強大な勢力に挟まれながら、独自の文化様式を保っていたと考えられています。ペルーの海岸地方は世界有数の乾燥地帯となっており、遺跡から数多くの染織品が良好な状態で見つかることで知られ、チャンカイ文化の遺跡からも、まるで昨日織ったかのような鮮やかさの織布や染布が多数出土しています。

表紙の絵は木綿平織の白布を2枚継いだものに描かれていますが、下方はかなり傷んでおり、類似した布で補修がされています。中央にマンガのキャラクターのような人物が両腕を開いて立ち（図1)、その上方に鋭い背びれと牙のある怪魚が虹のように弧を描く様子が黒色で表され、背景は薄茶色に塗られています。

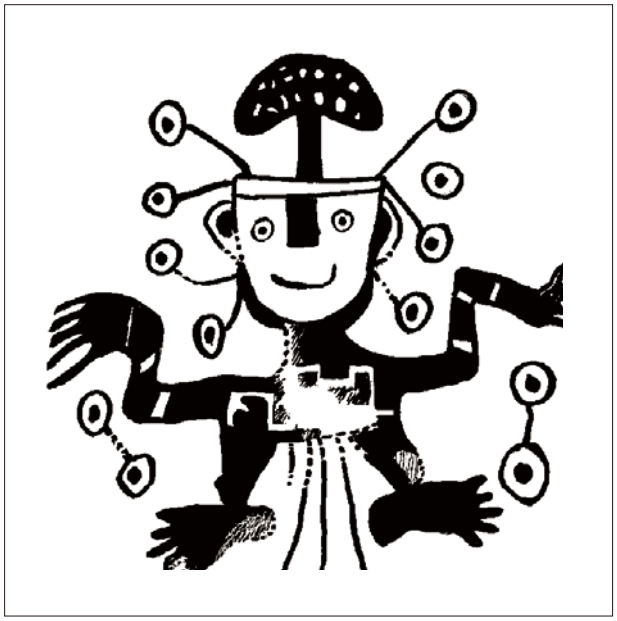


図1　　中央の人物

「中央に立つ人物」の表現は古代アンデスでは紀元前から、神人あるいはシャーマン（呪術・宗教的職能者）など超人的な人物表現にしばしば用いられるもので、染織以外にも石彫や土器、金工品等様々なものに表されてきました（図2)。

この布に描かれている人物像も、大きな幾何文様が入った衣装をまとい、額には金属製と考えられる

図2　　ボリビア、ティワナク遺跡（100－1200年頃）にある門形遺構、「太陽の門」にある浮彫帯中央部の人物像

飾りを付けており、チャンカイの人々にとっては何らかの宗教的な図像であったと思われます。紐に繋がった「目玉」のようなものは、チャンカイ以前の文化で、やはり神話的な人物像の頭部や体部から生え出るように描かれる首級（討ち取った人の首）や蛇に似た生き物に由来するものと考えられます。また左右上方にゆらゆらと泳ぐ「エイ」のような魚は、この人物が海に関わる信仰対象であることを暗示しています。出土状況が不明なので、どのように用いられていたかは明言できませんが、死者を包む布か、あるいは祈りや儀礼の場に掲げられた掛け布であったとも考えられます。奔放な描線が特徴のこのような大布は、チャンカイ文化の遺跡からは数多く出土し、需要高かったことが窺われます。いずれにせよ、このまん丸目玉の「神人」の微笑みで、心安らぐ当時の人々の気持ちが、今の私たちにも伝わってくるような気がしませんか？

ちなみにこの描染布は、ペルーの芸術家であり、国際的なファッションデザイナーのレイナルド・ルザ（Reynaldo Luza 1893－1978）の旧蔵品で（注)、昨年受贈した、三浦鴻氏（中南米研究家）のコレクションの内の1点です。

（井上 則子）

注）Hose Antonio de Lavalle & WernerLang, *Arte Precolombino. Tercera Parte. Pintura*, Banco de Credito del Peru, 1896 第2版　p.94-95

20年ぶりの新資料出現となる遠山邸建築・庭園設計図面について

―大工棟梁中村清次郎のご子孫から寄贈される―

久保木 彰一

表題のとおり、遠山邸建設時の建築図面が発見されたので報告をしたい。遠山邸については初心の方のために、まず施主の遠山元一と邸宅建設に関わった人々について、また、20年前になる前回の資料発見エピソードから始めよう。

今年4月で竣工後85年を迎える遠山邸は、戦前に皇族を接待するためにわずかな改築をおこなった以外は、大規模な改修工事もなく、当初の姿をよく留めている。木造建築の技術的なピークといわれる昭和初期に建てられた高級な和風住宅であり、戦前期だからまだ入手が可能であった銘木をふんだんに使って建てられた。しかも、施主が求めた都会的で洗練された建築意匠が邸宅全体に展開して、遠山家に豊かな住生活を提供した。

そして昭和45年（1970）に遠山記念館として一般公開を始めてからは、現代人が普段の生活ではめったに立ち入る機会のない本格的な近代和風建築を、自由に見てまわり体験することができる場所となっている。

さて、遠山元一が生家再興を成し遂げたのは昭和11年で、竣工の2ヵ月前には2.26事件が起こり、軍部独裁、統制経済へ加速していく重苦しい時代であった。

それ以前、元一が経営する日興證券前身の川島屋商店は、昭和2年の金融恐慌などの波乱を乗り越え、東京株式取引所の取引員免許を得て、資本を増資して基礎を固めていく最中であった。こうした多忙をきわめる昭和8年に、川島本宅の建設に取り掛かっている。

元一が記した『本宅再建の記録』に「明治三十八年八月兜町に丁稚奉公に出てから満三十年、夢にも忘れなかった生家の復興である。弟芳雄が宰領を買って出たので万事を彼に任せ、設計監理を室岡惣七君に委嘱し、大工の棟梁は中村清次郎君であった」とある。

室岡惣七は近郷入間郡出身で、入間市河原町の石川組製糸西洋館を設計監督した建築士。元一妹の静子の夫である山下経治（元一の片腕で、後に日興證券幹部）からの紹介であった。また、中村清次郎棟梁は、元一の普段の住まいである麻布区笄町（こうがいちょう）の邸宅建設を担当した中村良勝棟梁の弟。大規模な川島本宅建築を指揮するのは、私よりも腕がいい弟をとの進言による抜擢であった。

元一・芳雄の2人が希望する新しい住まいのイメージを、室岡がきっちりと図面に描き起こし、中村棟梁が多くの職人衆とともに、良質な資材を使って現実の建築に造り上げていった。そのような単純な作業分担通りに建設が進んでいったとは、とても思われない。

それぞれが理想とするデザインをぶつけ合い、設計変更や再検討、調整を繰り返して、完成の姿にまとめ上げていったのであろう。

画像や写真をディスプレーできる機器などない85年以上前であるから、鼎談の中央には建築図面の青図が広げられて、打合せが行われたに違いない。作成したのは室岡で、これから紹介する図面には「設計 室岡工務所」と入れた洋館型商標に、図面の内容と作成期日が記されている。（P.7,8参照）

20数年前に記念館の土蔵から出てきたそれらの図面は、木製小箱と百貨店の衣裳箱の2つの中に丸められ、畳まれて入っていた。戦前、戦後の川島本宅関係、麻布邸の増改築、別荘や親類宅のものが入り混じっていて、分別すると本宅新築時の図面が24図（重複含27枚）見つかった。配置図6、平面図6、立面図3、詳細図8、実測図1となり、内訳は手書き初期図面、室岡工務所の青図、そして竣工時に記念として作成した大型平面図、配置図である。

初期図面とは、方眼紙に鉛筆書、和紙に墨書の手書きのもので、間取りや配置は現状と大きく異なっており、実現しなかった構想段階の図面と考えられる。遠山家家族から，元一本人も図面を書いていたとの証言があったが、弟芳雄の可能性も否定できないので、残念ながら筆者を特定できていない。

図面の整理は未完成のままであったところ、平成24年（2012）に「遠山元一と近代和風建築」展を開催する運びとなり、図面を初公開することができ

た（退色しやすい青図はコピーを展示）。併せて制作した図録には、小さいながらもその図版を収録した。

そして平成30年に遠山邸が「旧遠山家住宅　九棟」の名称で重要文化財（建造物）に指定された時には、附（つけたり）として図面27枚も加えられている。

大邸宅なのに細部の意匠を表した詳細図は、欧米建築を学んだ室岡が得意の中棟2階洋間意匠と、トラス構造を加味した土蔵、長屋門、庭門などしかない。当時の庶民が家を建てる時は、町の大工さんに頼むのが普通で、希望を伝えた後はすべて大工に任せた。図面を作らずとも家は建ったのである。遠山邸においては、床の間などの形式は、奇をてらう表現を排して正当なる伝統様式を好んだので、棟梁の頭の中にあるプランをそのまま実現したのか。座敷意匠は、図面なしで進められたのであろうかと、図録には記した。

ところが、数か月前の昨秋に、思いがけず新しい図面が出てきた。これまでは未確認であった詳細図など20図（室岡工務所作成、重複含25枚）と、驚くことに庭園の設計図4図（龍居庭園研究所作成、重複含7枚）が加わることになった。まことに喜ばしい限りである。

中村棟梁家の連絡先は不明のままであったところ、清次郎の孫（3男の次女）にあたる安藤恵子さんから、東京阿佐ヶ谷の中村邸を整理するので、遠山家貼紙のある山水図2曲屏風を引き取ってほしいとの連絡があった。10月に依田徹学芸課長が伺って、屏風とドレッサーなどを預かった際に、建築関係の資料が一緒であった。また10月末日、解体前の中村邸の撮影に再訪した折には、先の庭園計画図や中村邸の棟札（幣束）を追加で寄贈された。

下掲リストの建築図面21図のうち、1南面東面立面図から19中棟十五畳詳細までの太数字No.の15図は、重ねて右端を上下の押え木2本で挟み、針金で綴じている。38×55cmほどの図面すべてを巻物のように巻き込めば、丈夫で携帯するにも便利であり、必要な図面を見る時は、上にある頁を右に寄せて広げればよい。これは、中村棟梁手作りの図面帳で、工事

遠山邸新収分建築図面リスト

					（工期参考）
1	遠山別邸設計図　南面　東面（立面図、左側欠損）	1/100	昭和8年7月6日	室岡工務所	
2	遠山別邸設計図　東棟平面詳細	1/100	昭和8年7月17日	室岡工務所	
3	遠山別邸設計図　東棟基礎杭	1/120	昭和8年7月17日	室岡工務所	
4	遠山邸設計図　　東棟基礎 変更ノ分	1/100	昭和8年11月28日	室岡工務所	
5	遠山別邸設計図　東棟　床、差鴨居	1/100	昭和8年7月17日	室岡工務所	
6	遠山別邸設計図　東棟小屋伏	1/100	昭和8年7月17日	室岡工務所	
7	遠山別邸設計図　東棟玄関	1/20		室岡工務所	
8	遠山別邸設計図　東棟断面其他	1/100	昭和8年7月17日	室岡工務所	
9	遠山別邸設計図　東棟矩計	1/20	昭和8年7月17日	室岡工務所	
10	遠山別邸設計図　東棟建具(1)	1/20	昭和9年4月3日	室岡工務所	東棟上棟S9.2.15
11	遠山別邸設計図　東棟建具(2)	1/20	昭和9年4月3日	室岡工務所	
12	遠山別邸設計図　東棟建具(3)　東棟建具一覧表		昭和9年4月3日	室岡工務所	
13	遠山別邸設計図　中棟平面詳細	1/50	昭和8年7月6日	室岡工務所	
14	遠山別邸設計図　中棟基礎	1/100	昭和8年11月28日	室岡工務所	
15	遠山別邸設計図　中棟基礎　変更ノ分	1/20	昭和8年11月28日	室岡工務所	
16	遠山別邸設計図　中棟階上下床伏	1/100	昭和8年7月6日	室岡工務所	
17	遠山別邸設計図　中棟小屋伏	1/100	昭和8年7月6日	室岡工務所	
18	遠山別邸設計図　中棟矩計	1/20	昭和8年7月6日	室岡工務所	
19	遠山別邸設計図　中棟十五畳詳細		昭和8年7月6日	室岡工務所	中棟上棟S9.2.15
20	遠山別邸設計図　離家　平面	1/100	昭和9年4月16日	室岡工務所	
21	遠山別邸設計図　離家　基礎	1/100	昭和9年4月16日	室岡工務所	西棟上棟S10.2.26

*1南面東面立面図は破損しているが遠山家既存図面と同じのため、新出図にはカウントしていない。
1以下の太数字15図は縦長の巻物状に仮綴じされていた。リストは内容ごとに配列したいので、別にある四つ折り図面を組み入れた。

現場で使われていたものに違いない。巻き癖がきつく、端に痛みがあるので、裏打ち修理の予定である。

1南面東面立面図だけは横幅が2倍で、左端を欠損している。不思議なことに、室岡工務所作成の遠山家既存図面15枚のうち、新出図面と重複しているのはこの南面東面立面図（日付は違う）だけである。すべての図面を2つに分けて、遠山家と中村棟梁それぞれで保管し使用する意味もない。きっちりと仕事をする室岡であったから、2セットを作成して総監督の芳雄と中村棟梁に手渡したはずである。

さて、新図面帳に東棟・中棟の基礎と、その変更図（昭和8年11月28日）が綴じられているが、既存図面の「敷地配置変更図」（昭和8年12月）によれば東棟表玄関は東向きを南向きに、中棟15畳は現在の大広間18畳に変更された。予定されている昭和9年2月15日の東棟・中棟の上棟に向けて、基礎位置の修正とコンクリート基礎工事が急ピッチで進められただろう。中村棟梁の図面帳には変更図の青図上に、玄関を90度回転させて向きを変えた修正赤線が加えられており、改定図面なしのまま工事が進められたのかもしれない。

既存図面中の遠山家自作の方眼紙手書き設計案ではどれも、玄関は南向きで、玄関から北東の台所にかけて斜め点線を書き入れ、「鬼門ニアタル窓ノ位置訂正を要ス」の付記も見られる。家相による間取り変更は遠山家からの指示と思われ、後には敷地の北東角に、鬼門除けとして稲荷社をお祀りした。このお稲荷さんは、昭和19年に伏見稲荷を勧請して分霊を祀るために一間社流造りで建てられた小社で、遠山邸建設に従事した中村棟梁はじめ職人一同が、仕事受注の返礼として建てたものであった。縁起かつぎというよりも時代の風潮であり、証券業の社長として商売の神様を大切にお祀りしたのである。

建築基礎については、室岡惣七が『落成所感』で「現在地面より7尺乃至8尺掘下げ割栗石（わりぐりいし）搗き固め更に床下高さ迄鉄筋コンクリート打となす」と記している。図面に壺打と表記される独立基礎が、RC造の鉄筋コンクリート基礎であるかどうかは外見ではわからなかったが、布基礎間にいく列も架けわたされた繋梁（つなぎばり）のコンクリート剥離箇所から鉄筋を確認している。こうした強固な基礎がその性能を発揮したことは、平成23年の東日本大震災において、大きな被害を受けずにすんだことからも証明されたと言えよう。

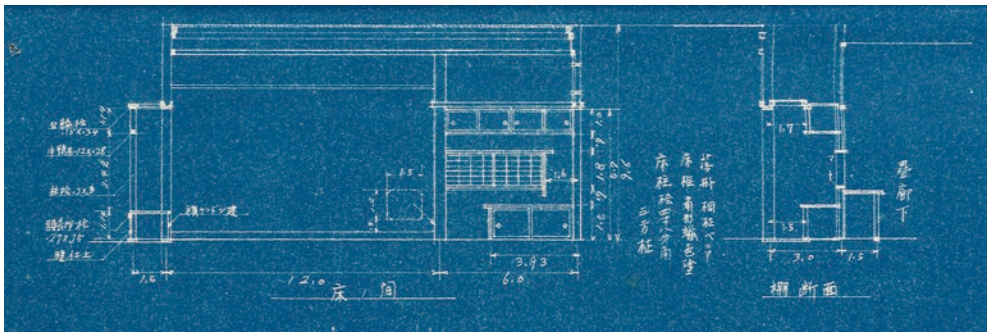
主屋の総建坪が212坪にのぼる遠山邸であるから、工事を進めていくうちに発生した問題の改善処理や、新たに入手した銘木を活用するための修正などが数多くあったであろう。図面と現状との違いを詳細に検討すれば、そこに新しい工夫や努力の跡が見つかるかも知れない。これは今後の課題としたいが、今は2点だけ触れておきたい。

まず、東棟建具の図面（10～12）が現われて、室岡が玄関舞良戸（まいらど）、玄関障子戸、土間境格子戸など29枚の姿図を描いている。同じ青図3枚目に載せられた建具一覧表では、建具126枚、襖18枚、雨戸14枚とする。東棟以外の図面がないのは残念で、もしかしたら中棟大広間の入側（いりがわ）廊下に入れた大型ガラス戸の図面に、米国・某社製磨きガラスなどの注記が加えられていたかも知れない。また、この建具意匠には、制作担当の藤井茂との意見交換も反映していたのかどうか興味深い。藤井は護国寺の茶室などの建具を調整した建具師と知られているからである。

次に図面19「中棟十五畳詳細」の左上に入れられた床の間意匠についてである。接待用途の広間15畳が床の間を背に、次の間10畳と主庭に南面する形式は、現状と変わりない。この青図紙面の大部分を使って室岡は檜格天井（ごうてんじょう）の断面図を原寸で起こしている。15畳は2段廻縁（まわりぶち）で、格縁（ごうぶち）下端には子組を刻む。10畳は1段廻縁で、格縁は猿頬（さるぼう）の面取りをする。2部屋の仕様の差を明確に表す設計要件は、現在の棹縁（さおぶち）天井においても継承される。大工の高度な技を必要とする格天井は、格式の高い家に用いられる形式で、室岡も10数年前に石川組製糸西洋館でも採用しており、遠山邸においても当然のように、15畳は格天井にすべしと、図面に描いたのであった。一方、既存図面の「階上応接室・階上寝室詳細」を見ると、棹縁天井であった2階の洋間の天井が1階とは逆に、春日杉の上杢板を格縁で組み上げた天井に変えることになる。格式張った印象を変えて軽快さを強調した意匠変更はなぜなのか、15畳の床の間の意匠とともに推測してみよう。

格式のある座敷には、それにふさわしい室礼の床の間が必要であるから、詳細図で表すには、かなりの紙面を使うことが予測されるが、図面左上に7.5×24.5cmの小図で済ませているのには驚く。その部分図と現状との比較を次に掲げよう。

書院造りでも華美な装飾を行わず、角（かく）の床柱や、天地に袋棚を設けるのは和風の真のスタイルだが、



図面19
中棟十五畳詳細　部分

〈主な仕様〉

		図面	現状
床の間	間口寸法	12尺	9尺
	落掛	桐柾	桐四方柾
	床柱	檜4寸8分角 三方柾	北山杉径6寸天然絞丸太
	床框	角形蝋色塗	蝋色艶消塗
床脇	間口寸法	6尺	9尺
		天袋・窓・地袋	地袋 欅珠杢天板
付書院			桐七宝花菱文透彫欄間

棚の間に違棚（ちがいだな）のかわりに窓を入れる。床脇裏側の殺風景な畳廊下にも棚を作り、窓からの障子越しの明りを通す設計であったが、珍しい意匠だけれども落ち着かないと反対意見が出たのかもしれない。18畳の床の間は、飾りの場として品格を保ちながら意匠は控え目にまとめられて行くのである。（平面図後掲）

遠山邸は、豪農風に数寄屋のテイストを加えた東棟、武家の書院造りをすっきりしたモダンスタイルにまとめた中棟、中棟2階洋間は和洋のデザインをバランスよく溶け合わせた部屋に、西棟は数寄屋の意匠と素材を自由自在に展開させる、まさに近代和風の典型を見せている。いずれも単一様式で統一するのではなく、幾つかの様式を違和感なく融合させ、しかもわざとらしくない自然な雰囲気を生んでいる。これは、3人の共通見解と見るよりも、1人の感覚的な判断、好みから創り出されたものではないか。それを決めることのできるのは、器用でセンス良く一流好みと慕われた遠山芳雄しか考えられない。

室岡設計士が建築全体のデザイン案を青図に示し、中村棟梁が伝統木造建築の技と意匠に基づいた補正を加えて、最後に芳雄が各部意匠の取り合わせと、部屋全体や空間のリズムが心地よく感じられるように調整する。その後は優秀な職人衆が中村棟梁の指揮のもとで、それぞれが納得するまで技巧を尽くす。

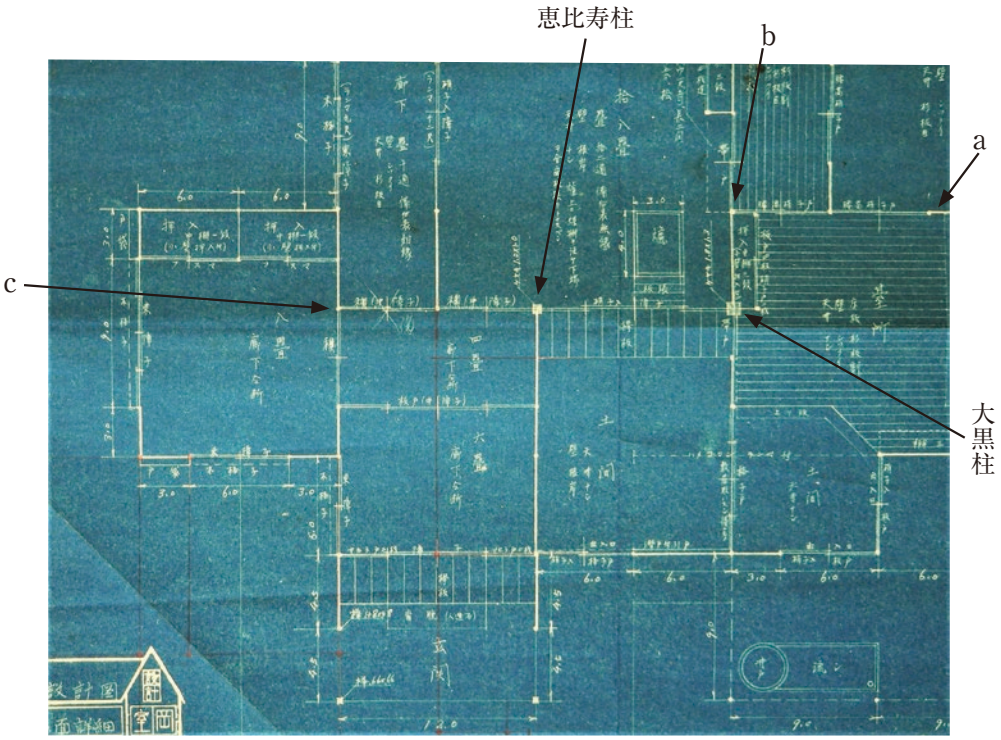
意匠が東棟と中棟以上に繊細な西棟の図面は、平面と基礎しか残されていない。着工が遅いこともあるが、東と中棟の上棟からすでに丸一年が経過して、中心になった3名のほか、すべての職人も遠山邸の完成形をイメージできるようになっていた。工事は各棟が時間差をつけての作業進行で、室岡の工程管理も複雑さを増し、詳細図も省略できるところは棟梁に任せたのかも知れない。

最後に、新出の庭園図面を紹介する。これまで遠山邸の庭園については、外部に設計を依頼したという記録も言い伝えもなかった。室岡の『落成所感』諸職一覧に「庭師 龍見清吉」とある経歴不明の東京の庭師が設計して造園も行ったと考えてきた。そこに、龍居庭園研究所の名の入った図面が登場した。

庭園について詳しい方は、龍居松之助をご存じであろう。大正期から東京高等造園学校や日本庭園協会を設立するなど、日本造園史の研究と教育における草分けとして活躍し、戦後も日本庭園の保存公開に尽力した。大正9年（1920）には龍居庭園研究所を開き、公私の庭園の設計、施工監理をされたという。その龍居松之助が、遠山邸庭園を設計したことが明らかになった。作者が判明したので、庭園の作品価値が定まり、著名作家の作品歴に新たに加えられるであろうことは、大変に有意義といえよう。設計図は第2,4,6案と地割図の4点が残され、流れの起点や方向、南側の池の形が現状とやや異なる設計が当初されていたことがわかる。建築図面と庭園図面のいくつかを部分図で御覧いただこう。

遠山邸新収分庭園図面リスト

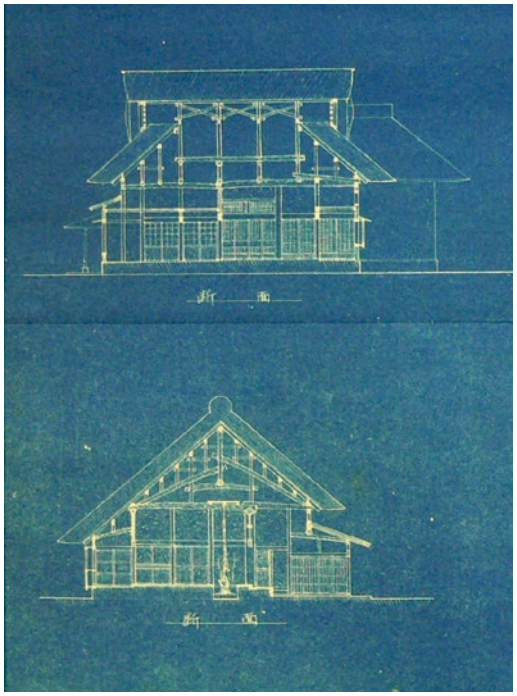
1	遠山家御別邸御庭　第二案　平面図	1枚	1/200	昭和9年9月12日	龍居庭園研究所	
2	遠山家御別邸御庭計画　No.4 変更ノ分	1枚	1/200	昭和9年10月5日	龍居庭園研究所	
3	遠山家御別邸御庭園計画　plan　No.6	4枚	1/200	Oct.31.1934	龍居庭園研究所	（次頁に掲載）
4	遠山家御別邸御庭園計画　第六図　地割	1枚	1/200	昭和9年11月12日	龍居庭園研究所	



図面2 東棟平面詳細 部分

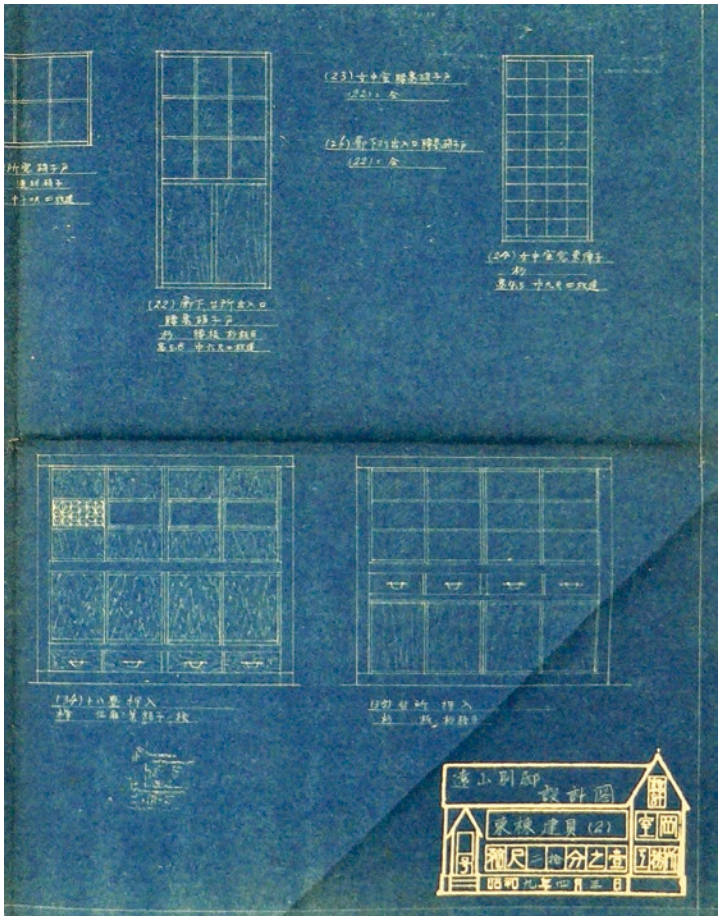
この図の北方位は右。よって、下方の玄関は東向きの設計であった。大きな茅の大屋根桁行（けたゆき）側に設けた玄関は柿葺き（こけらぶき・図面では栗小羽板）の庇を付けた構えである。右に内玄関をつけ、8畳の土間式台を上がると、炉を切った18畳の居間になる。縁無し畳や、右手前に欅1.3尺角大黒柱、左に1尺の恵比寿柱というのが室岡の設計であった。

玄関が左上の8畳の位置へ南向き表玄関に変更される他は、ほぼ現状の形ができあがっていたことがわかる。



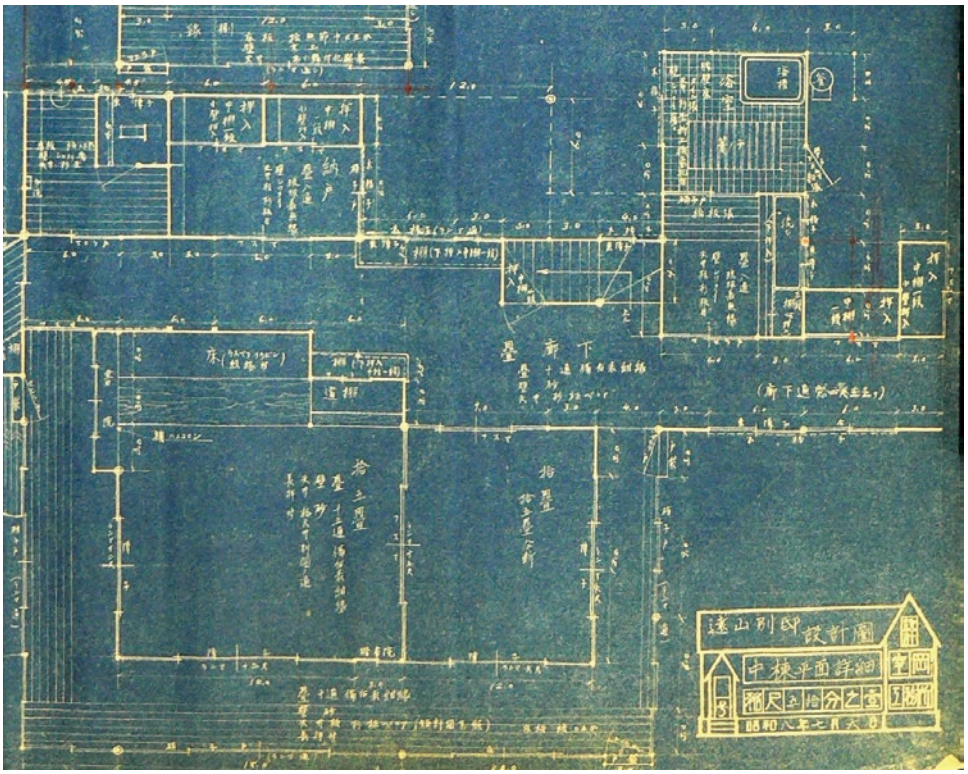
図面8 東棟断面其他 部分

桁行西側の段面（図面2平面図のa～b、大黒柱～c）と、下図はb～大黒柱の延長線を切段面とした図。



図面11 東棟建具(2) 部分

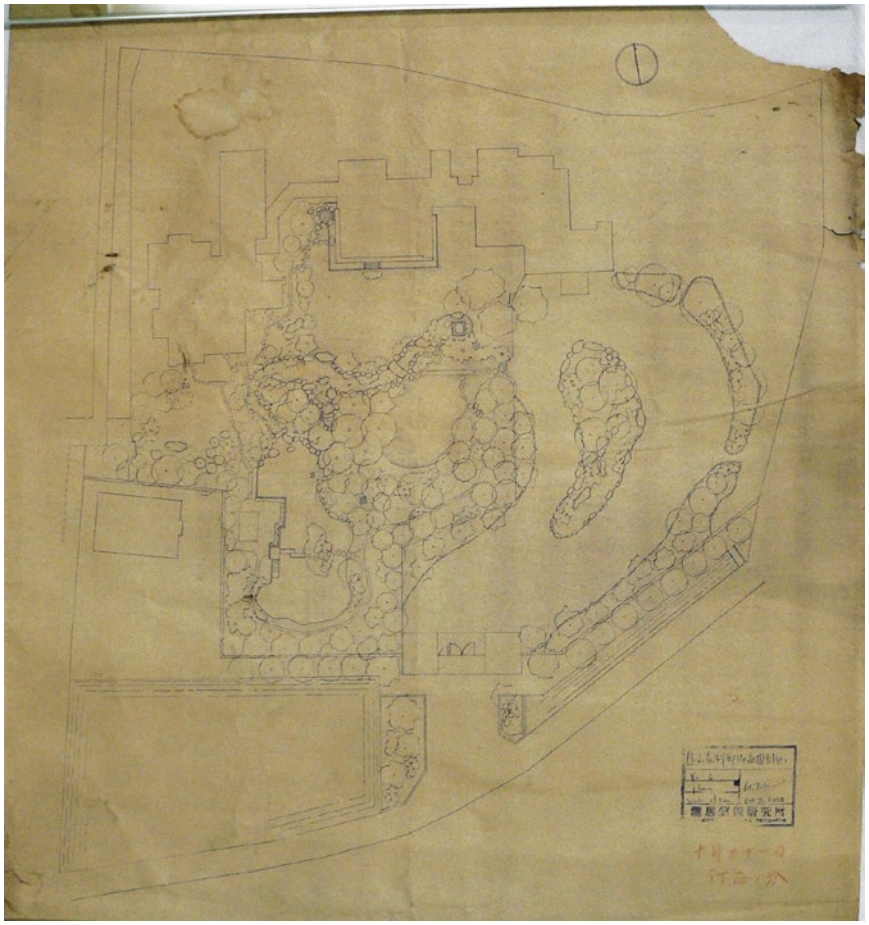
下段右の台所押入は、この姿図に近い形のものが、今も造り付けの収納棚として現存する。



図面13 中棟平面詳細 部分

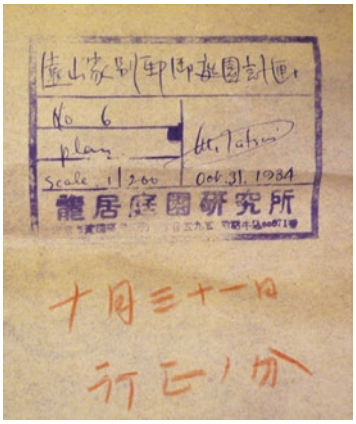
右上の浴室左に化粧室が付かず、15畳間の床の間・床脇前に1間半の長畳2枚を足して18畳の広間に変更する前の図面である。床と床脇の幅を1間半に揃えることは前述した。

龍鬢畳（りゅうびんだたみ）の床畳も奥行き半間で前に地板を加える形を、特注による奥行き4尺5寸の中継ぎ表床畳を採用して、床をすっきりした晴朗な姿に改良することになる。



図面3 御庭園計画　plan No.6

第2案から大きな設計修正は少なく、東側の右半分弱が長屋門から主屋玄関への車廻しで、内塀を境に左を主庭とする。主屋の南に大きく芝地をおき、その東寄りの組井筒から流れが始まり、孤を描きながら南の池へ下っていく。池は現状よりも数倍大きく、中島を設けて、変化のある園路を作っている。第4案では中棟西側の蹲（つくばい）からも別な流れを作り、合流する設計であったが中止された。この第6案は4枚あり、下の標は鮮明な別の図から採った。



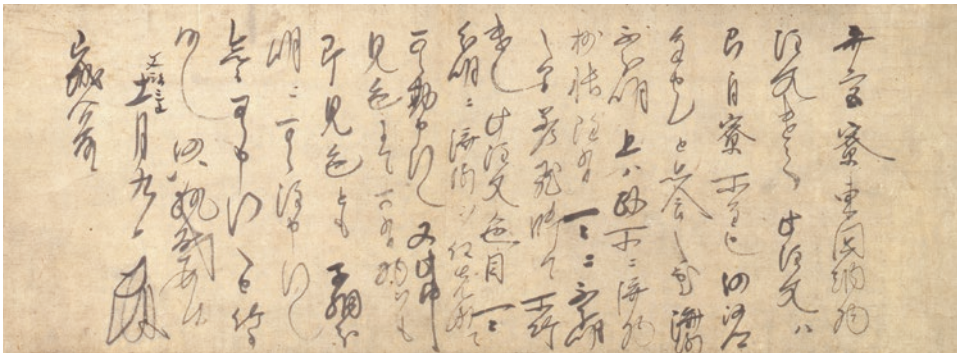
特別展「遠山記念館の50年」

4月3日（土）～5月30日（日）
後援：読売新聞社

1970年5月10日、旧日興證券（現SMBC日興証券）創業者である遠山元一は、自らの建築した旧遠山家住宅と、蒐集した美術コレクションを公開するため、財団法人遠山記念館を開館させました。新型コロナウイルスの影響により開催が一年遅れましたが、開館50周年を迎えることを記念した特別展「遠山記念館の50年」を開催いたします。この50年のあゆみを振り返るとともに、重要文化財6件、重要美術品9件、名物3点を一堂に集め、当館を代表する作品のすべてを皆さまにご覧いただきます。
※会期中一部作品の展示替がございます。
※会期中に再来館していただき、前回入館時の半券の提示で「入館料が半額になる」リピート割引もございます。

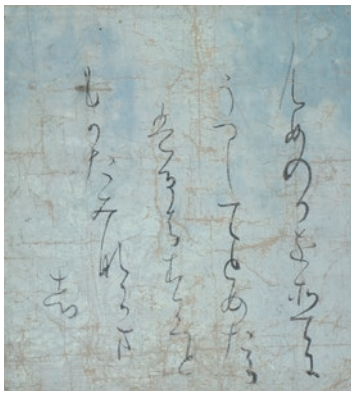
「佐竹本三十六歌仙絵　頼基像」　重要文化財
鎌倉時代（13世紀）（展示期間：4/3 ～ 4/30）

英一蝶「布晒舞図」　重要文化財
江戸時代中期（18世紀）



源頼朝「書状」　重要文化財　文治3年（1187）

岡田半江
「春靄起鴉図」重要文化財
天保12年（1841）



「寸松庵色紙」　重要文化財
平安時代（11世紀）
（展示期間：5/1 ～ 5/30）

「秋野蒔絵手箱」　重要文化財
鎌倉時代中期-後期（13－14世紀）
（展示期間：5/1 ～ 5/30）

● 会期中のイベント

50周年記念連続講座「遠山記念館の重要文化財」

開館50周年の特別展「遠山記念館の50年」の開催に併せて、当館で所蔵する重要文化財6件につき、各作品の専門家による、分かりやすく、かつ専門的な解釈を含めた連続講座を行います。
遠山記念館所蔵 書画工芸品のうちの重要文化財作品6点を、深く知るチャンスです。奮ってご参加ください。開催日と内容は以下の通りです。

各回午後2:00 ～ 3:30予定。事務所棟地下会議室にて、定員先着25人。参加費300円（別途入館料）
電話：049-297-0007または メール：tkkk@e-kinenkan.com で、お申し込みください。
受付開始日：3月27日（土）
なお、感染症拡大防止のため、入館時にはマスク着用、検温と連絡先の記入をお願いいたします。
感染症状況により予定を変更、中止する場合には、お申し込みの方には連絡をいたします。

・4月17日（土）
「佐竹本三十六歌仙絵を味わう―歌と肖像の情緒―」 井並林太郎（京都国立博物館）

一昨年、分割後の100年振りの再結集として話題となった展覧会を担当しました。歌仙絵の最高峰「佐竹本三十六歌仙絵」の魅力について、鎌倉時代の絵画史をふまえながらお話します。

・4月24日（土）
「風流才子・英一蝶（はなぶさいっちょう）―「布晒舞図」を中心に―」 池田芙美（サントリー美術館）

英一蝶は元禄期を中心に活躍した絵師です。狩野派に入門し、絵を学びますが、47歳の時に三宅島に島流しになるなど、激動の人生を送りました。この配流中に制作された作品は〈島一蝶〉と呼ばれ、高く評価されていますが、その最高傑作とされるのが「布晒舞図」です。本講演では「布晒舞図」を読み解きながら、一蝶の波乱万丈な生涯と、幅広い画業をご紹介します。

・5月8日（土）
「大坂の南画家　岡田半江（おかだはんこう）」 星野 鈴（前東京造形大学教授）

南画盛行期の19世紀、大坂の文墨界で特に愛された画家が岡田半江でした。「春靄起鴉図（しゅんあいきあず）」はその半江の代表作として夙に有名な作品です。夢見るような中国への憧れと、しっとり艶冶な趣を醸す画面は、商業主義的イメージの大坂文化にもう一つの顔があったことを気づかせます。この画の美術史的背景と、画家の生き方を大坂の文化的風土の中で考えてみたいと思います。

・5月16日（日）
「源頼朝書状と山城介久兼（やましろのすけひさかね）・畠山重忠」 清水 亮（埼玉大学）

遠山記念館所蔵「源頼朝書状」は、頼朝の家人で吏僚的活動をした「山城介久兼」という人物に関わるものです。山城介久兼は、伊勢国で命じられた業務で畠山重忠と因縁を持っています。本講演では、遠山記念館所蔵「源頼朝書状」の内容、その前後の時期における山城介久兼の活動を紹介するとともに、彼らと畠山重忠の関係についても言及します。

・5月22日（土）
「秋野蒔絵手箱　― 蒔絵を楽しむ ―」 永田智世（根津美術館）

日本中世の蒔絵史を彩る一群に手箱があります。手箱とは、身の回りの品々を収納する箱のことで、鎌倉時代以降は化粧用具を収めた遺例が多く、神宝として神社に伝来するものもあります。遠山記念館の「秋野蒔絵手箱」もそのひとつで、華麗な蒔絵装飾には当時の技術、デザインの粋が集められています。その鑑賞のツボを、同時代の作例と比較しながらご紹介します。

・5月29日（土）
「はじめての寸松庵色紙（すんしょうあんしきし）―書かれた当初の姿と千年伝来―」 久保木彰一（遠山記念館）

平安時代に日本固有の文字として仮名が生まれました。それが最も芸術的に発展した時期の名筆のひとつである寸松庵色紙の魅力を読み解き、千年前に書かれた作品が姿を変えて伝えられてきた経緯に触れます。

コレクション展 1

6月12日（土）～9月26日（日）

日本美術から中国美術、オリエント美術、アンデス美術と、幅広いジャンルの作品を所蔵する遠山記念館のコレクションの中から、各分野の優品を選んで展示いたします。今回は日本の「色絵蝶牡丹に鳥文鉢」や中国の「五彩狩猟文鉢」をはじめとする世界各地の彩文陶磁と、川端龍子「龍門」（展示期間：6/12 ～ 8/22）など日本の書画や染織品をあわせてご覧いただきます。

「色絵蝶牡丹に鳥文鉢　古九谷」
江戸時代前期（17世紀）

川端龍子「龍門」
昭和13年（展示期間：6/12 ～ 8/22）

「遠山記念館 友の会」入会のご案内

「遠山記念館 友の会」は、遠山記念館を何度も訪れたいという方や、邸宅・庭園および美術館の活動やイベントに積極的に参加したいという方のための集まりです。皆様のご入会をお待ちしております。

会員特典
1. 会員証の提示により、同伴者1名まで一年間何度でも無料で入館できます。
2. 展覧会やイベントなどを掲載した「遠山記念館だより」を送付します。
3. 次の有料イベントへの参加が無料となります。
   - ・建築の専門家による講演会「遠山邸研究会」
   - ・当館コレクションについて外部研究者にお話をいただく「講演会」
   - ・当館学芸員の研究テーマをわかりやすく解説する「土曜講座」
4. 当館主催の茶会（雛祭りの茶会、端午の節句茶会等）の席料が半額となります。
5. 当館の出版物、ミュージアムグッズを2割引で購入できます。

年 会 費　3,000円　　**有効期間**　入会月より１年

申し込み方法

『遠山記念館だより』同封の入会申込書に必要事項を明記の上、遠山記念館まで郵送、もしくはFAXしていただくと共に、同封の払込取扱票に、住所・氏名・電話番号を記入の上、年会費3,000円の払い込みをお願い致します。入金の確認後、会員証を送付します。領収証は会員証の送付を以て代えさせていただきます。利用の有無に拘らず、会費の払い戻しはできません。

送り先／〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675　　公益財団法人 遠山記念館 担当 松村
TEL：049－297－0007　FAX：049－297－6951

※「友の会」会員の皆様へ
有効期限が2020年３月～ 2021年７月の方の会員期間を、会期満了月より「４か月」延長いたします。ご来館の際に会員証をお持ちください。

●遠山家端午の節句飾り　4月14日（水）～5月5日（水・祝）

遠山元一が長男一行（大正11年生まれ）の初節句の祝いとして揃えた、端午の節句飾りです。毎年、雛壇飾りと同様、遠山邸の中棟大広間の次の間に飾られます。その中には、人間国宝の二代平田郷陽や京都の大木平蔵など名工の作品も含まれ、鎧兜を中心に、鍾馗、神武天皇、日本武尊、応神天皇、源為朝、加藤清正、本多忠勝など勇猛な姿の人形や飾り馬、また金太郎をはじめ、子どもの姿を表した愛らしい人形などが並びます。

●ご来館のみなさまへ●

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、以下の点にご協力をお願いいたします。

・37.5℃以上の熱のある方、咳・咽頭痛などの症状のある方は、来館をお控えください。
・混雑緩和のため、展示室への入場を制限させていただく場合があります。
・入館時に検温ならびに連絡先の記入をお願いします。
・マスクの着用をお願いします。
・館内にアルコール消毒液を設置していますので、手の消毒に使用してください。
・館内では、会話を控えめにし、周囲の方と距離を保ってください。
・作品、展示ケース、壁や柱などには手を触れないでください。

利 用 案 内

◇入館料

	一　般	学　生
特別展	1,000円	800円
通　常	800円	600円
美術館閉館時	600円	400円

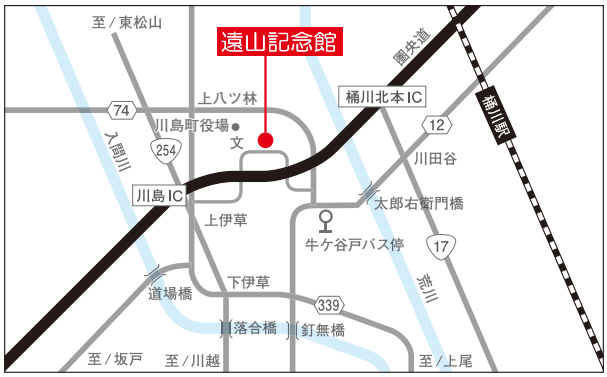
※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引き

◇開　館　午前10：00～午後4：30まで
（入館は午後4：00まで）

◇休館日　月曜日（月曜が祝日の場合は翌日）
及び4月13日（火）、5月6日（木）、5月7日（金）

◇邸宅、庭園のみ公開
6月1日（火）～6月11日（金）
9月28日（火）～10月8日（金）

◇詳しい展覧会情報は下記ご覧ください。
URL http://www.e-kinenkan.com



電車・バスでのご来館の場合
●東武東上線・JR埼京線　川越駅
●西武新宿線　本川越駅　●JR高崎線　桶川駅
いずれも「川越駅－桶川駅」間の東武バスで
牛ヶ谷戸（うしがやど）下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合
●圏央道川島ICより7分
●川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより　第60号　2021年3月発行
編集発行　公益財団法人 遠山記念館　〒350-0128埼玉県比企郡川島町白井沼675
編集担当　井上 則子　TEL: 049-297-0007　FAX: 049-297-6951